

ホットな
福祉情報誌

はあとふる ふくしま

2024

1 月

No.324



特集

介護人材を取り巻く環境と介護支援ロボット

シリーズ [未来へつなごう“ふくしま”から]

特別編

令和5年度 瓜生岩子賞受賞者の横顔

2023年度シリーズ ふくしまのみらい

「よしよし、うまくいってる」
お遊戯会に向けて準備は
バッチリのようです！
(須賀川市・白鳩保育園)



介護人材を取り巻く環境と 介護支援ロボット

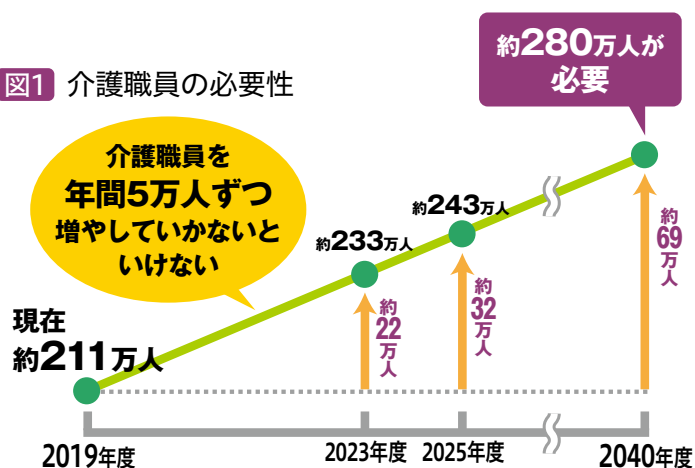


厚生労働省では、介護現場の人手不足の改善、人材確保対策のために「介護支援ロボット（以下、介護ロボット）」の導入を推奨しています。介護ロボットとは、駆動系をはじめ、センサー系、知能・制御系の3つの要素を併せ持つ知能化した機械技術を有し、移動支援や入浴支援など、さまざまな種類があります。今回の特集では、県内の介護福祉士養成校での介護ロボットを使った学びや、介護の現場で活用されている事例をご紹介します。



日本では、少子高齢化が急速に進展しています。厚生労働省の試算によると、将来においても介護サービスを提供するためには、さらなる介護職員の確保が必要となっています。たとえば、**図1**の通り、介護職員は2025年度には約243万人、2040年度には約280万人が必要になると言われています。この計算によると、2023年度から2025年度にかけて、介護職員を年間約5万人ずつ増やしていかなければならないことになります。このような状況において、介護サービスの質の向上や人材確保の対策の1つとして「介護ロボット・ICT（情報通信技術）等のテクノロジーの活用推進」が注目されています。

図1 介護職員の必要性



介護人材確保の対策の一つとして
介護ロボット等の活用推進が掲げられています。



介護ロボットの一例

国が介護ロボットの活用を推進しているねらいは大きく3つあります。まず1つ目には、介護の質の維持・向上があります。介護ロボットやICT機器の導入により、現在の介護業務にかかっている時間を短縮し、その分余裕ができた時間をケアの充実に充てることが出来ます。2つ目として、業務効率の向上につながる3つ目は、介護職員の身体的な負担が軽減されることで、離職防止・人材確保へとつながっていくことです。そのため、介護ロボットやICTなどのテクノロジーの導入を推奨しています。

図2 介護ロボットの導入（介護事業所全体） n=8,632 ※複数回答

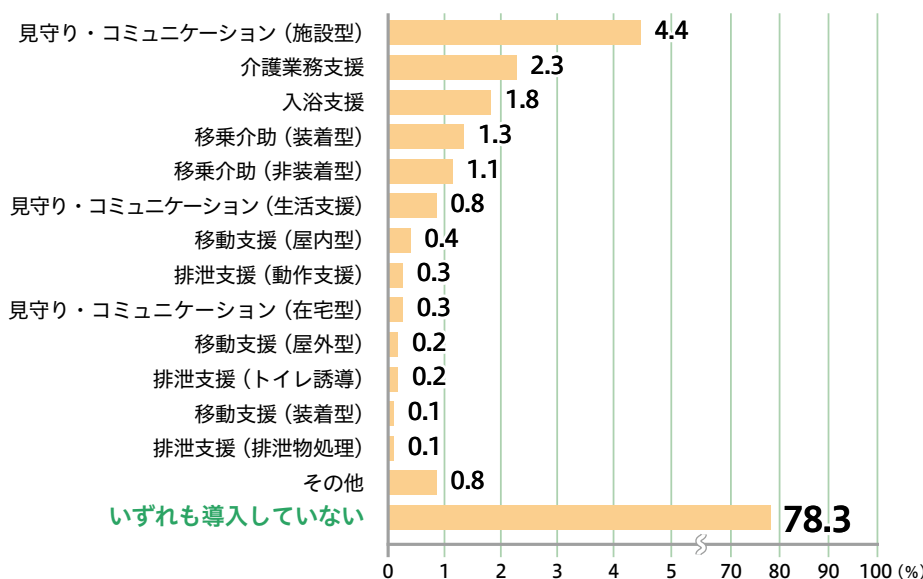


図3 ICT機器の活用状況

(複数回答) (介護保険サービス系型別)		訪問系						施設系（入所型）		施設系（通所型）		居住系		居宅介護支援		全 体	
回答事業所数		2,528	1,291	2,667	984	766	8,632										
パソコンで利用者情報（ケアプラン、介護記録等）を共有している		54.0	74.7	49.3	51.1	64.2	55.9										
記録から介護保険請求システムまで一括している		45.7	58.4	40.5	33.2	59.0	45.6										
タブレット端末等で利用者情報（ケアプラン、介護記録等）を共有している		33.8	43.1	27.2	33.0	30.9	32.5										
グループウェア等のシステムで事業所内の報告・連絡・相談を行っている		28.2	30.1	18.5	21.0	18.0	23.4										
給与計算、シフト管理、勤怠管理を一元化したシステムを利用している		25.6	27.3	19.9	19.5	19.1	22.5										
情報共有システムを用いて他事業者と連携している		19.5	14.6	12.2	11.3	18.7	15.3										
他の事業所とデータ連携によりケアプランやサービス提供票等をやり取りするためのシステム		14.4	7.1	10.4	5.6	18.4	11.2										
その他		0.7	1.1	0.9	1.2	0.3	0.8										
いずれも行っていない		19.2	10.4	22.8	23.6	14.4	19.3										
無回答		8.0	5.7	8.6	9.7	6.4	8.1										

出典：公共財団法人介護労働安定センター「令和4年度介護労働実態調査」

介護ロボットの普及の状況・ICT機器の活用状況

それでは、福祉の現場では介護ロボットの導入はどのくらい進んでいるのでしょうか。介護事業所全体の78・3%が「いずれも導入していない」

「い」となっており、介護ロボットの普及が進んでいるとはまだまだ言えない状況です。また、ICT機器の活用状況につ

いても、「いずれも行っていない」事業所が19・3%にのぼっており、こちらについても十分に活用されているとは言い難い状況です。

介護支援ロボットやICT機器の導入で人材不足の解消や人材確保に明るい未来が開けてくると思います。

県内の介護福祉士養成校の一つである東日本国際大学 健康福祉学部 社会福祉学科 介護福祉コースで、介護支援ロボット・ICT機器等（以下、介護ロボット）を使った実践的な学びを行っている金成教授と学生の皆さんにお話を伺いました。



- 1.ベッドから安全かつ簡単に移乗できる「移乗です」の操作方法を学生たちに教える金成教授
- 2.東日本国際大学では、「介護福祉VR実践室」を設け介護ロボットについての学びを深めている



介護ロボットには、移動支援機器（職員用・利用者用）、排泄支援機器、見守り支援機器、入浴支援機器、介護支援機器などがあり、屋内外のさまざまな場面で介護者の負担を減らすことができます。しかし、現場において介護ロボットを導入しても、その担当者が別部署に異動してしまったりと使わなくなってしまうケースも多く見られるようです。

「介護ロボットを導入すると、作業を省力化することで利用者一人一人に向き合う時間が増え、介護サービスの質が向上します。また、事業所における介護ロボットの存在は、ロボットに抵抗の少ない若い世代が就職するきっかけにもなります。介護ロボットを上手く活用すれば、職員の業務負担を減らすことができ、離

職率の低下にもつながります」と金成教授は話します。しかし、「例えば、負担軽減が見込まれる介護ロボットを導入したとしても、その事業所において解決すべき業務課題を特定しないままでは、思ったほどの効果は期待できません。その事業所において、どの業務に時間がかかっているのか、または何が負担となっているのかなど、しっかりと調査した上で、それらを解決するために必要とされる介護ロボットは何であるのかを検討し、導入を進めることが大切です」とのことです。

東日本国際大学では、4年間をかけて介護支援ロボットの学びを深めることで、将来介護の現場でどのような介護支援ロボットが必要なのかを提案できる、知識と技術・倫理を

併せ持った人材の育成を目指しています。介護福祉コース1年生の皆さんからは「介護支援ロボットにはいろいろな種類があり、実際に試してみると、その特長や利点がよく分かり勉強になります」「介護者、利用者ともに支援が必要、これからはロボットと協働していく時代だと思います」などの声を聞くことができました。

金成教授は最後に「介護支援ロボットに代表されるDX（デジタルトランスフォーメーション）の導入が進めば、若い世代だけでなくシルバー世代が働くきっかけとなる可能性もあり、介護の現場に明るい未来が開けてくると思います」と話を締めくくりました。

東日本国際大学
健康福祉学部 社会福祉学科
介護福祉コース長
かなり あけみ
教授 金成 明美さん



ICT機器の導入により介護者の負担が大幅に軽減しました。

実際に介護ロボットやICT機器を導入した「介護付有料老人ホーム いわきふるさとの楽園／いわきふるさとの楽園ペンシエロ」の佐藤園長に、導入のきっかけやその効果などについてお話を伺いました。

介護ロボット導入のきっかけは、

「いわきふるさとの楽園」の入居者様の中に体格の大きい方がいらっしたことでした。職員の負担軽減のため、移乗・移動支援に介護ロボットの一つであるパワーアシストを導入しました。しかし、その方が退園されてからは、使用頻度は減ってしまいました。その後、「いわきふるさとの楽園ペンシエロ」の開所にあたり、改めて業務課題を検討した後、各居室からの呼び出しに対応できる見守り機器や介護記録システムなどを導入しました。

特に、職員の負担軽減となっているのが、日々の記録をタブレット端末から入力できる介護記録システムです。それまでは、入居者様への介護業務を行った後、サービスセン



株式会社福寿会
いわきふるさとの楽園
さとう たけお
園長 佐藤 丈夫さん

ターに戻って介護記録を入力する事務業務があり、かなりの負担となっていました。新しいシステムでは、園内のどこからでもタブレットから入力や音声入力まで行えるようになり、職員の事務作業が大幅に軽減したとのことです。

人材の確保や定着を図るためには、職員の働きやすい環境を整えること、入居者様が快適に過ごせる環境を整えること、その両方を両輪で進めていくことが大切だと佐藤園長は考えます。負担が軽減され生まれるエネルギーを、入居者様への支援に

向けてもらい、介護の仕事にやりがいを感じてもらいたいと話されます。そのツールの一つとして、今後さまざまな介護ロボットやICT機器を積極的に活用していきたいとのことでした。



介護ロボットを上手に導入することで、職員間のコミュニケーションの増加、利用者との親密な関係が図れることが期待されます。



特別編

令和5年度

瓜生岩子賞 受賞者の横顔

瓜生岩子※刀自（文政12年（1829年）〜明治30年（1897年））は、現在の喜多方市に生まれ、孤児救済のための育児院や貧困者向けの済生病院の開設等、その生涯を献身的に社会福祉のために捧げた本県が生んだ社会福祉事業の先覚者です。福島県社会福祉協議会ではその遺徳をしのび、偉業を後世に伝えるため、その精神にふさわしい功績のあった方々を毎年顕彰しています。

第31回となる本年度は、令和5年11月17日に開催した福島県社会福祉大会（会場：パルセいいざか）において表彰を行いました。今月号は未来へつなごう" data-bbox="747 293 946 813"/>

※高齢女性の尊称



福祉の垣根を越えて地域共生社会の実現に寄与

受賞者
佐久間啓さん（郡山市）

心の声に耳を澄ませて
今の自分に何ができるかを考える

「自分は患者さんたちに生かされているんです」。そう話すのはあさかホスピタルグループ理事長の佐久間さん。これまでの「障がい」、「福祉」という概念を超え、アートを通して人と人とのつながりをつくり多様な価値を共有する『はじまりの美術館』『精神障がいの方が働く、街で人気のパン工房『BuonoBuono』、さらには子どもたちの健全な成長を願う複数の子ども食堂を経営するなど、従来の福祉の垣根を越えた多種多様な支援を行っています。

あさかホスピタルグループのクレド（フテン語で「信条」を意味する）は『心の声に、耳を澄まそう』です。こ



の言葉の意味を佐久間さんに伺うと「心の病や障がいをもつ方々は言葉で言い表すことができない自分の思いを持っている。その思いを汲み取り、今の自分たちに何ができるかを考え、行動に移していくことが大切だと思っています。このような考えのもと、福祉の事業にあたる人は上から目線ではなく、この方のおかげで自分も生かされているという感謝の心で行動することが大事だと思い、設定し

30年以上にわたって地域福祉の向上に貢献

受賞者
大場盛子さん（南相馬市）

地域のさまざまな困りごとに取り
添い、専門機関へのつなぎ手に

「50歳を過ぎたときに民生委員、児童委員になってから30年以上になりますが、苦にしたことなんて一つもありません」と話す大場さん。平成4年12月に民生委員・児童委員に就任以来、生活困窮者や高齢者、子育ての悩みなどの相談に向き合い、地域福祉の向上に努めてきました。平成4年からひがし地区福祉委員として行政と地区住民の架け橋としての役割を担う一方で、平成15年からは、原町市（現・南相馬市）遺族会の会長として、市の戦没者追悼式の運営や戦没者遺族へのサポート活動も行なうなど多方面にわたる活躍をされています。

「私は戦争遺児で父親を亡くしまし



たが、この地で皆さんに可愛がられて育ちました。恩返しとまではいきませんが、自分にできることはやろうと思っております」と大場さん。平成10年からは原町市（現・南相馬市）の生涯学習推進委員として地域の生涯学習のサポート役を務めるかわら、昨年度からは相馬地区社会教育委員連絡協議会会長として、市や県域での生涯学習・社会教育の振興にも貢献しています。



赤い羽根で ささえあい

社会福祉法人 福島県共同募金会

〒960-8141 福島市渡利字七社宮 111 (福島県総合社会福祉センター内)
電話 024-522-0822 FAX 024-528-1234
メールアドレス akaihane@axel.ocn.ne.jp
ホームページ https://akaihane-fukushima.or.jp/

福島県共同募金会にお寄せいただいた赤い羽根共同募金は、福島県内の福祉活動を支援するために役立てられています。今回は、みなさまの温かいご寄付により行われた活動をご紹介します。



スマイルリボン (いわき市)

助成事業名:重症児・医療的ケア児の
災害時対策を考える講演会開催事業

医療的ケア児者の防災を 地域で一緒に考えていくために

東日本大震災から間もなく13年、東日本台風の水害から4年。重い障がいを持つ子どもたちや、その家族から聞こえてくる声は「何も変わらない」と諦めに近い言葉でした。重症心身障がい児者と家族は、日ごろから医療的機器等の荷物が多いなどの理由から外出を躊躇したり、「迷惑になるのでは」と行きたい場所の選択肢が狭まってしまったりすることが少なくありません。特に災害時には、避難所へ行くことを躊躇してしまったりするなど、助けを求めることができませんでした。こうした課題意識からこの講演会を企画し、開催するにあたっては、家族会だけでなく、病院、行政、学校、訪問系事業所、そして地域住民の皆さまへ声をかけ、月に1度の担当者会議へ参加していただきました。また、呼吸器を使用している子の、一時避難所への避難訓練を実践し、徒歩での移動の困難さや平時より地域の皆さんとつながり合うことの大切さを改めて学ぶことができました。講演会は満席の100名で、参加者の皆様からも「協働することと一緒に考えていきたい」という声や、ご家族からは「諦めずに声を上げていきたい」と前向きな言葉をいただきました。これからも、障がいがあってもなくても共に悩み、共に笑い、そして共に歩んでいけるよう引き続き活動をしていきます。本当にありがとうございました。



ました」と教えていただきました。
**障がいの有無に関わらず
みんなが輝く地域共生社会の
実現を目指す**

多方面にわたる活動の原動力は、先代院長のお父様の影響が大きかったのだとか。「他の子と分け隔てなく重度の障がいをもつ子どもたちと接している様子を見て幼少期を過ごしてきました。そんな父の姿を見て自分も困っている人を助けたいと思いました」と佐久間さん。

今後の目標は、障がいの中で特に偏見の目を向けられがちな精神障がいを抱える子どもの自立を支援していくこと。「いま精神科に通う患者さんの割合は1位が10代、2位が20代と圧倒的に若者が多くの割合を占めています。しかし、精神障がいの子どもたちに対する支援制度は18歳で終わってしまうことがほとんどです。そうした制度の垣根を越え子どもたちが自立できるように、今後も支援を続けていきたいです」と佐久間さん。地域のみんなが輝けるように、自分たちにできることはないか考え、形にしていける。地域共生社会の実現に向けて佐久間さんの挑戦はこれからも続きます。

**子どもから高齢者まで
地域のみんなと
笑顔でふれあいながら**

「私が民生委員・児童委員になった頃は、担当区の日の出町には対象世帯が40〜50軒ほどしかなかったのですが、今では570軒まで増えました。活動範囲は広くなりましたが、昔から少しも変わらないと思うのは、この地域に暮らす皆さんの人の良さ。声をかければみんなすぐに集まってくれるので、本当に恵まれていると思います」と大場さんは、地域の方々への感謝の言葉を度々口にされましたが、それは、人徳のなせる業だと思えました。また、民生委員・児童委員のほ

か数々の役職をこなし、さらに、書道、華道、茶道教室の師範として、地域の子どもたちとも多く触れあう機会を大切にしています。

周りの人には、「そんなにいろいろやって大変じゃないの?とよく言われるのですが、忙しいう感覚は特にありません。自分なりに動いているだけです」と大場さん。今後の抱負を伺うと、「地域を見守らなくちゃと大上段に構えるのではなく、あくまで自然体で。いろんなところに顔を出せば、地域の様々な情報も入ってきますし、運動にもなるから健康にもいいですよ」と元氣な答えを聞くことができました。

第77回福島県社会福祉大会が開催されました

去る11月17日(金)にパルセいいざか(福島市)において第77回福島県社会福祉大会を開催いたしました。

今年度は受賞者、さらに5年ぶりに一般参加者も加えて、約650名の皆さまにご参加いただきました。

記念講演では、ルーテル学院大学名誉教授の市川一宏氏より「地域共生社会づくりに向けて」と題してお話いただきました。式典では、県知事の感謝52個人・団体、大会会長の表彰・感謝294個人・団体、県社会福祉協議会会長の表彰・感謝72個人・団体、赤い羽根共募運動スローガン受賞者7名の方々に、表彰状の授与及び感謝状の贈呈が行われました。また、第31回目となる瓜生岩子賞は、佐久間啓氏と大場盛子氏が受賞されました(活動の詳細はP6~7『未来へつなごう“ふくしま”から』でご紹介)。

その後、大会宣言において、私たち社会福祉関係者が、県民の理解と参加のもと、共につながり支えあう「ふくしまの地域共生社会づくり」の実現に努めていくことを参加者全員で誓い、来年郡山市で開催予定の第78回大会に引き継ぎました。



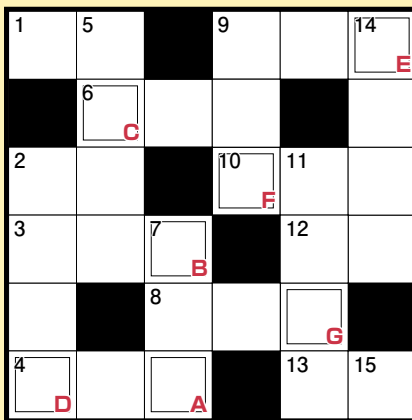
クロスワードにチャレンジ!

▶ヨコのカギ

- ① ⇄東
- ② 5W1Hの「When」
- ③ 絵の具の青と黄色を混ぜると…
- ④ 2024年は1日多い〇〇〇年
- ⑥ 冬至に入のお風呂
- ⑧ 物品を収納・保管。日本最古のものは「正倉院」
- ⑨ 女性のきょうだい
- ⑩ キリストの体はパン、ではキリストの血は?
- ⑫ 黙って見ていてだけで手出しをしないこと
- ⑬ 呑んでも酔わない酒豪を例えるキッチン用品

▼タテのカギ

- ② 本当の名前以外の別の呼び方
- ⑤ 発掘調査等で出てくること。土器が〇〇する
- ⑦ ⇄現実
- ⑨ 主に聴覚障がい者が使う視覚言語
- ⑪ もめごと、トラブル、ごたごた
- ⑬ DNA上でタンパク質に関する設計図



全部できたら二重ワクの7文字をABC順に読んでいくと、それが答えです。



正解者の中から
抽選で3名に
プレゼントが当たる



今日のプレゼント

NPO法人コーヒータイム
(二本松市)

アクセスホームさくぐ「ラスク」
とのコラボ商品セット

当選者の発表は商品の発送を
もって代えさせていただきます。

応募方法 ハガキまたはEメールにパズルの答えと ①住所、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号、業種 ②本誌に対するご意見、ご感想、ご要望を全てご記入の上、ご応募ください。

締切 令和6年2月15日(木)

宛先 〒960-8141 福島市渡利字七社宮111
社会福祉法人 福島県社会福祉協議会「はあとふる・ふくしまパズル係」

メールでのご応募はこちら!



／ 多数のご応募ありがとうございました ／

12月号の
正解

「シゴトタイケン」(仕事体験)

※ご記入の個人情報は適切に管理し、目的以外に使用しません。
※本誌に対するご意見、ご感想、ご要望の一部は、「読者のおたより」に掲載させていただく場合もございます。

11月号に寄せられた読者のおたよりから

災害時に助け合えるような地域の人間関係をふだんから作ることが大切と改めて感じました。
まずは挨拶から。
(67歳 主婦)

国際手話を初めて知り有意義でした。今後の関連イベント情報なども掲載いただくとありがたいです。
(65才 公務員)

先日、耳が聞こえないお客様と接する機会がありました。筆談でも意思疎通が難しく、自分が手話を使えたら良かったのに、と思いました。手話を学びたいと思いました。(34才 事務職)

編集後記

特集でお話を伺った金成教授によると、介護ロボット(利用者の見守り支援機器)の導入で、入居施設の夜勤時の介護者のひと晩の総歩数が10,000歩以上から7,000歩程度に減少した事例もあるとのことでした。10,000歩以上歩くこと自体が驚きでしたが、「歩数の違いで疲れ度合いが全く違うんですよ」とのお話がとても印象的でした。

(人材研修課 渡部智子)